

1.調査目的等

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2.学校ごとの指標

【短期指標】

H29年度2年次の県学力調査の福岡県標準化得点をもとにH30年度3年次の全国学テの文科省標準化得点を次の数値以上にする。

国語A 97 国語B 91 数学A 98 数学B 91

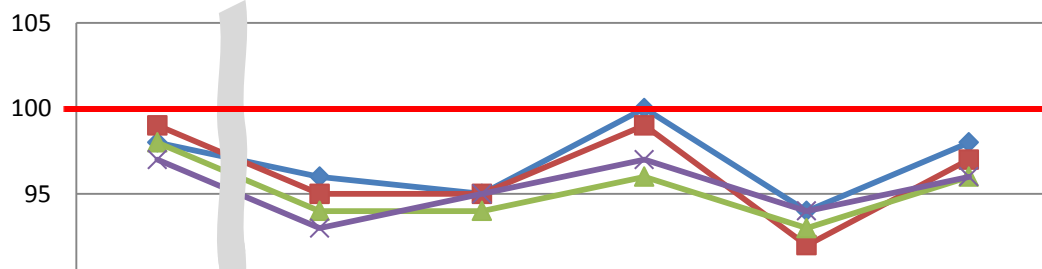
3.指標に向けての取組

- 国語 授業の理解度を高めること、また他者に物事を説明する力を実践的に身につけさせるため、授業のまとめを生徒に行かせた。全員に伝わるように説明しなければならないという意識を持たせたことで授業への集中度も上がった。また、問題演習を多く取り入れることで「分かった」から「解ける」という意識を高めた。古典に関しては百人一首や和歌に親しむ活動を取り入れた。
- 数学 基礎・基本の定着が弱いので、家庭学習で反復可能な課題を毎時間出題した。併せてTTでの個別支援や習熟度別授業を実施した。また、全国学テの過去問や活用力診断テストの教材集などを週末課題や長期休暇中の課題として活用した。

4.調査結果(全国の平均正答数を100としたときの文科省標準化得点)

	国語A	国語B	数学A	数学B
本校	98	97	96	96
嘉麻市	98	98	97	96
全国	100	100	100	100

推移



	22年実施	26年実施	27年実施	28年実施	29年実施	30年実施
◆ 国語A	98	96	95	100	94	98
■ 国語B	99	95	95	99	92	97
▲ 数学A	98	94	94	96	93	96
✕ 数学B	97	93	95	97	94	96

5.各学校における分析

【国語】 目標数値に対して、国語A +1ポイント 国語B +6ポイント

語彙に関する設問で課題が見られた。授業中に、難しい語句が出て教師が解説し、意味調べをさせていなかったことが定着できなかった要因と思われる。これまで入試前に「ことわざ・故事成語・四時熟語・熟字訓」に取り組んできたが、もっと早い時期に取り組んでいかなければならない。また、目的に応じて文章を読み、内容を整理して書く力が弱いことがわかった。これはグラフが使われている説明文などを読む際はグラフが文章の中心的な部分のどの部分と関連しているかを確認するなどして書き手の伝えたい内容をよりの確に読み取る力をつけていく必要がある。

【数学】 目標数値に関して、数学A -2ポイント 数学B +5ポイント

一次関数の意味を理解しているかどうかをみる問題や、数学的な表現を用いて説明する問題に課題が見られた。全国学テの点数に結びついていないのは、基礎基本の定着に時間がかかり、活用問題(B問題)への経験値を高める時間が不足していることや、こちらが高い正答率となるだろう、定着したはずだと思っている問題(数A問題番号12:本校正答率17.3%)でも5割定着していない実態を見ると定期的に振り返りをしていくことにも力を入れていかなければならない。

6.各学校における今後の取組

【国語】 自校採点后、国語科は漢字に関しては毎時間小テストを行い、定着を図ってきた。説明文では文章全体を読み取るのではなく形式段落の要旨をつかみ、それをつなぎ合わせて全体を読み取る方法を継続して取り組む。

【数学】 数学科では、生徒のつまずきを見つけるための確認テストを可能な限り毎時間行ってきた。さらに中テストを行い、不合格者には昼休み、放課後で合格するまで頑張らせる。学習プリントや自学ノートを活用し、反復学習に取り組むことで学習内容の定着を図っていく。

自校採点后に取り組んだことをさらに質を上げていく(具体的には定期考査問題の質を向上させる)ことや入試に向けた復習(国語では文法、数学では関数、図形など)を週末課題等で通年で取り組ませる。また、数学では単元のイメージを掴みやすいように教材・教具の工夫に力を入れる。

【家庭学習】 計画的な宿題(週末課題)の提示と自学ノートの取組を継続する。1年90分、2年100分、3年120分以上の家庭学習時間の確保を目指し、7割以上の生徒が達成できるよう指導し、さらに学期に1回、家庭学習時間調査を実施し、意識づけを行う。

7.嘉麻市教育委員会としての今後の取組

〔嘉麻市学力向上推進プランに基づき、学力向上検証改善委員会を核として学力向上具体策の浸透・徹底を図る。〕

嘉麻市教育アクションプラン、嘉麻市学力向上全体構想、各学校学力向上プランの関連を明確にし、具体策を全ての学級に浸透させる。

短期検証改善サイクルの実施状況を把握し、好循環に向かうよう適時性のある指導を継続する。

学力向上プランの実効性を高めるための指導助言を行うとともに、各学校における効果的な実践の普及に努める。

高校入試問題等の定期考査への取り入れと生徒による授業評価を確実にし、その結果、日常の授業がどのように変容し「かく活動」がどのように充実したのかを年間を通して検証する。

家庭学習の個別化を推進するとともに、取組に具体的な指標をもたせ、進捗状況を把握し支援を行う。

主幹教諭研修会を小中別分科会とし、それぞれの学校種の課題に即応する研修内容を工夫する。